「アトムがあってよかった」そんな保育園であり続けて

園長　野中　泉

定年を迎え、園長として最後のアトムっ子巻頭ページを書く日がやってきました。この 7 年間、毎月書き続けてきたアトムっ子。何を書いたらいいか何も思いつかず、印刷当日朝まで真っ白な画面とにらめっこしていたこともあるし、アトムっ子に私が書いた文章に納得がいかないと怒りの意見をいただいた号もあります。正直、毎月原稿の締め切りがあることはなかなかに苦しいことでもありましたが、でも、それがあったからこそ怠け者の私も、7 年間の「アトムでの大事な日々」を言葉にすることができたのだと今は感謝しています。時々思い出して笑ってしまうことがあるのですが、ある若いお母さんがひょこっと事務室の窓から顔をのぞかせてこんなことを言ってくれました。「ずっと、アトムっ子なんて読んでなかったんやけどな、読んでみたら、のなちゃんなかなかいいこと書いてんな。園長先生の文章なんて、どうせ桜の花がなんとかって、つまんないこと書いてあるんやろうって思ってとばしてた。ごめんな」。この 7 年間に届いた日報に書いてくれた何通ものうれしい感想、テラスで「読んだよ」と声をかけてもらったこと、「全部大事にとってある」と言ってくれた人たち、本当にありがとうございました。

15 年前、私も小さなひとつの文章でアトムに出会ったひとりです。月刊社会教育という雑誌の巻頭「かがり火」（リレーで全国の方々が書いていました）。2010 年 11 月号に「子育て最前線の現場から」という題名で市原悟子前理事長が書いた原稿が無かったら、私は今こうしてアトムにいません。「日本にこんな誠実な保育園があるのか」とポロポロと涙がこぼれたその保育園の園長になるなんて、当時は思いもしませんでした。でも、「子どもの育ちにトラブルは不可欠」「文句を言いに乗り込んで来てくれたら人が育つチャンスやねんと思う」「本当に子育て支援しようと思ったら、きれいごとじゃおわれない」当時、必死でメモした市原の言葉たちは、自分が園長としてこの場所に立つことになって、改めて「ほんとうだな」と腑に落ちることばかりです。

2 月の終わりに夜間保育の懇談会に出ました。あいにく感染症の流行もあり参加は 5 歳児の保護者 2 名だけだったのですが、クラスの懇談会とは、また一味違う共に苦楽を共にした同志（夜間担当の保育士とも保護者同志も）のふりかえりみたいなあたたかな懇談会でした。ひとりのお父さんはこんなことを言いました。「アトムがなかったら、どうなっていたんだろうと思う。夜間保育がなかったら少なくともうちは生活できなかった。クタクタになって暗い道を帰ってアトムに迎えに来ると、俺のことも『おかえり』って迎えてくれる。ここで『ただいま』ってホッと一息切り替えられることが、どれだけありがたかったか」。もうひとりのお母さんはこんなふうに言いました。「ほんとうに、夜間がなかったら、私は今の仕事を続けられなかったと思う。仕事も子育ても、いっぱいいっぱいで、何度も挫けそうになってた。他の家より長時間預けていることにも罪悪感があったし…。でも、美味しい夕飯も食べさせてもらって楽しそうに遊んでる我が子の姿にほっとして、おんなじように疲れた顔で頑張っている夜間の仲間（親たち）の姿にも、うちだけじゃないんだと励まされて」。このお父さんの一番つらかった時期も、このお母さんが暗い駐車場で泣いていた日のことも、私も家族のことのように「ああ、そうだった、そうだった」と思い出します。「ただ、預けるだけの保育園だったら、こうは思わなかった」とふたりが口を揃えて言いました。「普通の保育園だったら、お願いしますと黙って預けるだけだったかも。でも、アトムは仕事のことも、家庭のことも、まるごと話せる。知ってくれてる人たちだから、行き帰りの時間にもちょっと話を聞いてほしいって思える」。「行き帰りに無駄話をしていい保育園ってキャッチフレーズどうかな？」とみんなで笑いあったのですが、こんな言葉たちに、自分たちの仕事は何のために、どこに向かっているのかを何度も何度も思いださせてもらってきた、そんな 7 年間だったと園長としての仕事を感謝と共にふりかえらずにはいられません。

アトムは一年に 360 日、朝 7 時から夜 10 時まで開いているなかなかに大変な保育園です。でも「アトムがなかったら、子育てできなかった」そんな親たちが、私をそしてここで働く仲間たちの今日を励まし続けています。「アトムがあってよかった」明日も誰かがそう思えるような誠実な保育園が続いていくことを信じ、最後のおわかれの言葉にしたいと思います。